

文明共存への好機

宗教以外の共有点軸に

小原克博
同志社大教授
(比較宗教倫理学)



こはら・かつひろ 65年生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了(神学博士)。同大学一神教学際研究センター幹事、京都宗教学大学院連合事務局長も務める。単著に『神のドラマトウルギー』(教文館)、共著に『EU世界を読む』(世界思想社)など。

9月18日(ドレスデンでは10月2日)に投票されたドイツ総選挙では、第1位のキリスト教民主・社会同盟(CDU・CSU)と4議席差で第2位のドイツ社会民主党(SPD)が共に過半数を取れず、なお連立協議が難航している。失業問題や財政再建など内政に関しては両党に歩み寄れる素地があるものの、外交問題に関しては隔たりは大きく、困難を予想させる。

EU加盟に反対している。トルコ加盟をめぐる人権保護制度、経済力などが繰り返し問題点として指摘されてきたが、こうした点についてトルコがEU側の基準をほぼ満たしたことは、昨年12月のEU首脳会議でも認められた。にもかかわらず、正式加盟に反対する世論がこきり、EU内に噴出しているのはなぜか。

だが、9・11で、その状況は一変した。ドイツ新政権の舵取り次第では、正式に開始されたEUとトルコとの加盟交渉に影を落とすだけでなく、近年ヨーロッパで増大しているイスラムフオビア(イスラム教徒への憎悪感情)を一層顕在化させる役割を果たすことになりかねない。昨年11月、オランダで映画監督がイスラム過激派男性に殺害された事件や、今年7月のロンドンでの爆破テロなどがその伏線となっていることは言うまでもない。

向上につなげていこうとする戦略を支持するようになったEUのリーダーたちは少なくとも、9・11以降、顕在化してきた文明間の軋轢に対し、アメリカが国際社会の納得する政策を示してきたとは言えない。そうであればこそ、9・11に端を発して生じてきたEUを取り巻く一連の困難や国際政治的文脈を、かえって文明の共存への好機ととらえ直すことはできないか。

ところで、外交問題としてこの選挙で大きな関心を引き、また両党の見解の相違を際立たせてきたのは、トルコ

のEU加盟に反対している。トルコ加盟をめぐる人権保護制度、経済力などが繰り返し問題点として指摘されてきたが、こうした点についてトルコがEU側の基準をほぼ満たしたことは、昨年12月のEU首脳会議でも認められた。にもかかわらず、正式加盟に反対する世論がこきり、EU内に噴出しているのはなぜか。

だが、9・11で、その状況は一変した。ドイツ新政権の舵取り次第では、正式に開始されたEUとトルコとの加盟交渉に影を落とすだけでなく、近年ヨーロッパで増大しているイスラムフオビア(イスラム教徒への憎悪感情)を一層顕在化させる役割を果たすことになりかねない。昨年11月、オランダで映画監督がイスラム過激派男性に殺害された事件や、今年7月のロンドンでの爆破テロなどがその伏線となっていることは言うまでもない。

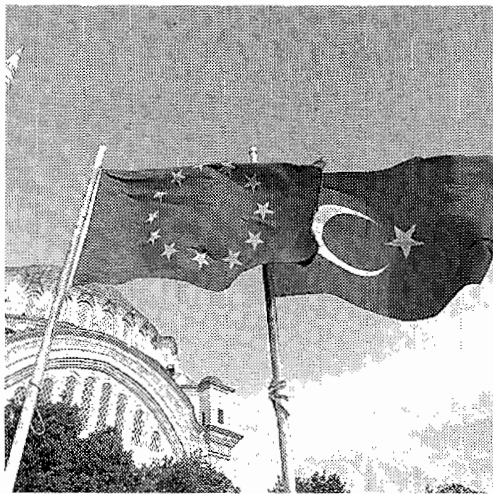
すなわち、トルコのEU加盟は、宗教は異なるものの、世俗主義や近代化などの共有点を手がかりにしながら、より大きな一つの単位を作りあげていこうとする壮大な文明的「実験」だとの位置づけである。加盟交渉に先立ち、トルコのエルドアン首相は「EUがキリスト教クラブになるか、グローバルパワーになるかの選択だ」と強調した。ドイツ新政権そしてEUが迷走することなく、この「実験」に誠実な取り組みを続けていくことを見守りたい。

とところで、外交問題としてこの選挙で大きな関心を引き、また両党の見解の相違を際立たせてきたのは、トルコ

のEU加盟に反対している。トルコ加盟をめぐる人権保護制度、経済力などが繰り返し問題点として指摘されてきたが、こうした点についてトルコがEU側の基準をほぼ満たしたことは、昨年12月のEU首脳会議でも認められた。にもかかわらず、正式加盟に反対する世論がこきり、EU内に噴出しているのはなぜか。

だが、9・11で、その状況は一変した。ドイツ新政権の舵取り次第では、正式に開始されたEUとトルコとの加盟交渉に影を落とすだけでなく、近年ヨーロッパで増大しているイスラムフオビア(イスラム教徒への憎悪感情)を一層顕在化させる役割を果たすことになりかねない。昨年11月、オランダで映画監督がイスラム過激派男性に殺害された事件や、今年7月のロンドンでの爆破テロなどがその伏線となっていることは言うまでもない。

すなわち、トルコのEU加盟は、宗教は異なるものの、世俗主義や近代化などの共有点を手がかりにしながら、より大きな一つの単位を作りあげていこうとする壮大な文明的「実験」だとの位置づけである。加盟交渉に先立ち、トルコのエルドアン首相は「EUがキリスト教クラブになるか、グローバルパワーになるかの選択だ」と強調した。ドイツ新政権そしてEUが迷走することなく、この「実験」に誠実な取り組みを続けていくことを見守りたい。



トルコ・イスタンブールのモスクの前でなびく欧州連合(EU)とトルコの旗=AP

のEU加盟に反対している。トルコ加盟をめぐる人権保護制度、経済力などが繰り返し問題点として指摘されてきたが、こうした点についてトルコがEU側の基準をほぼ満たしたことは、昨年12月のEU首脳会議でも認められた。にもかかわらず、正式加盟に反対する世論がこきり、EU内に噴出しているのはなぜか。

だが、9・11で、その状況は一変した。ドイツ新政権の舵取り次第では、正式に開始されたEUとトルコとの加盟交渉に影を落とすだけでなく、近年ヨーロッパで増大しているイスラムフオビア(イスラム教徒への憎悪感情)を一層顕在化させる役割を果たすことになりかねない。昨年11月、オランダで映画監督がイスラム過激派男性に殺害された事件や、今年7月のロンドンでの爆破テロなどがその伏線となっていることは言うまでもない。

すなわち、トルコのEU加盟は、宗教は異なるものの、世俗主義や近代化などの共有点を手がかりにしながら、より大きな一つの単位を作りあげていこうとする壮大な文明的「実験」だとの位置づけである。加盟交渉に先立ち、トルコのエルドアン首相は「EUがキリスト教クラブになるか、グローバルパワーになるかの選択だ」と強調した。ドイツ新政権そしてEUが迷走することなく、この「実験」に誠実な取り組みを続けていくことを見守りたい。